欧米作家と日本近代文学

ドイツ篇

福田光治・剣持武彦・小玉晃一 編

教育出版センター

比較文学シリーズ

欧米作家と日本近代文学　全五巻

編者紹介

福田光治（ふくだ みつはる）　立教大学教授

剣持武彦（けんもち たけひこ）　二松学舎大学教授

小玉晃一（こだま こういち）　青山学院大学教授

第四巻　ドイツ篇　　検印省略

昭和五十年七月十二日発行　©

編集　福田光治　剣持武彦　小玉晃一

発行者　柴崎芳夫

発行所　株式会社　教育出版センター

東京都豊島区北大塚三―二九―二

電話　〇三（九二）七〇八九三〇（代）

振替口座　東京一四六一二

郵便番号　一七〇

◇乱丁・落丁はおとりかえいたします。

3390—3004—1475

《執筆者紹介》——掲載順——

①生年月日　②出身地　③現住所　④電話　⑤最終学歴　⑥現職　⑦専攻　⑧主要業績

星野慎一（文学博士）

①明治42年1月1日　②新潟県

③248鎌倉市二階堂267-99

④0467-22-5014

⑤東京帝国大学

⑥南山大学教授

⑦ドイツ文学，抒情詩

⑧『若きリルケ』（昭和26，河出書房）『リルケとロダン』（昭28，河出書房）『晩年のリルケ』（昭36，河出書房新社）『外国文学修業』（昭41，大門出版）翻訳：『リルケ詩集』（昭30，岩波文庫）『マルテの手記』（昭46，旺文社文庫）『ゲーテ詩集』（昭48，潮文庫）その他

鈴木重貞

①明治36年12月13日　②岐阜県

③583大阪府羽曳野市羽曳が丘西5-2-30　④0729-56-6648

⑤京都帝国大学

⑥大阪大学名誉教授，四天王寺女子大学教授，図書館長

⑦ドイツ文学，比較文学

⑧『ドイツ語の伝来』（昭50，教育出版センター）

鈴木和子

①昭和5年2月28日　②東京都

③156東京都世田谷区桜1-62-11

④03-429-4575

⑤早稲田大学大学院　博士課程

⑥日本女子大学教授

⑦ドイツ文学，比較文学

⑧『ハイネ探求』（昭40，吾妻書房）„Heine in Japan“ In: „Heinrich Heine. Streitbarer Humanist und volksverbundener Dichter“ Weimar 1974.『ハイネ—比較文学的探求—』（昭50，吾妻書房）

岡田朝雄

①昭和10年11月19日　②東京都

③115東京都北区赤羽南2-18-8

④03-901-7444

⑤学習院大・中央大学大学院

⑥東洋大学助教授⑦ドイツ文学

⑧『立体ドイツ文学』（昭44，朝日出版社）訳書：H・カロッサ『幼年時代』，『詩集』（昭41，三修社）G・エーゲルト『スヴァトスラフ・リヒテル』（昭45，朝日出版社）『千一夜物語』（昭50，ブックマン社）

大久保寛二

①昭和5年4月11日　②神戸市
③東京都北区西ケ原1-27-3古河ガーデンマンション506号
④03-915-1245
⑤上智大大学院西洋文化研究科
⑥立教大学教授
⑦ドイツ現代演劇
⑧「変化する人間—ブレヒト初期の理論と叙事的技法」(昭38)「ベルトルト・ブレヒトにおける"改作"」(昭41)「白墨の円の系譜」(昭47)「ブレヒトの『仔象』における『白墨の円』の主題(昭47)

江頭彦造

①大正2年生　②佐賀県
③167東京都杉並区下井草2-16-12　④03-396-3422
⑤東京大学文学部国文学科
⑥上智大学教授
⑧『現代詩の研究』(昭33，寧楽書房)『抒情詩論考』(昭47，右文書院)共著『自然主義文学』(昭37，勁草書房)共著『近代詩論の研究』(昭47，角川書店)共著『昭和詩論の研究』(昭49，日本学術振興会)

村田経和

現在学習院大学よりドイツミュンヘン大学の日本語・文学の講師として渡独中。

渡辺　勝

①昭和7年6月11日　②埼玉県
③330埼玉県大宮市盆栽町165盆栽住宅1-201　④0486-66-5776
⑤東京大学大学院修士課程修了
⑥埼玉大学教授　⑦ドイツ文学
⑧「ヘッセにおける生の命題について」(昭34,「ドイツ文学」第23号)「ヘッセの『シッダルタ』における愛の意味」(昭36,「熊本大学法文論叢」第13号)「『ガラス玉遊戯』の精神性について」(昭38,「ドイツ文学」第31号)「斉藤茂吉の『写生説』とゲーテの『自然』」(昭50，俳誌「山火」第316号)

立川洋三

①昭和3年7月5日　②愛知県
③338埼玉県与野市大戸489
④0488-31-8619
⑤東京大学文学部独文学科
⑥立教大学教授
⑦現代ドイツ文学
⑧論文「詐欺師的典型—トーマスマン『セエリックス・クルル』について—」(昭33，立教大学一般教育部研究報告集第三号)「フォンターネ評価の試み」(昭42，立教大学ドイツ文学科論集1号)翻訳：カフカ著「審判」(昭44，集英社)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はしがき

比較文学研究は戦後の学問の国際化の気運のなかで大きく進展しつつある。日本の近代文学研究のために従来寄与してきた諸業績は、もっぱら日本の作家における欧米文学の影響という角度からなされてきた。そうした成果は最近において数々の研究書や講座として世に示されている。しかしいまだ国別に外国の作家をまとめ、その作家の日本文学への影響を系統的に論述した一連の叢書や講座はその類を見ない。私どもはもはや日本の比較文学の研究がそうした叢書を作るべき段階に達していると判断した。また、比較文学への世上の期待はそうした叢書を求めていると感じるにいたった。たまたま教育出版センターでも比較文学の書物を出したいということで相談を受けたとき、私どもはそこで上記のような企画を提案したわけである。

私どもは比較文学の研究上、常々多くの学恩を受けつつある先輩・知友の協力を求め、そのもっとも得意とする作家を受けもっていただき、国別・作家別に、五巻のシリーズを編むことができた。とくに本シリーズでの特色は外国文学研究家と日本文学研究家の双方に担当していただいた点にある。比較文学の研究には自国及び外国文学の研究者相互の協力がぜひとも必要と思われる。一人にして両者を兼ねなければならないのが比較文学者であるが、おのずからその資質・能力には限度がある。おのれをわきまえ、他のすぐれた成果から謙虚にしかも批判的に学ぶことからこそ研究の

進展があろう。その意味でも本シリーズは最適の執筆者に登場していただけたと確信している。なお比較文学の方法はある方向を持ちながらも、読者がこのシリーズで実際に読みとられるように、そのアプローチのしかたには多様性がある。そしてそこに今後の課題もあると思う。

読者は本シリーズを国別・作家別にその最も興味のおもむくところから読みはじめることができる。そして欧米諸国の文学を代表するすぐれた個性が、日本の文学者にどのように受容され、変容し、日本文学に新しい要素を植えつけたか、あるいはまた拒否されたかをつぶさに見ることができよう。かくて読者も新たな問題意識のもとに作品に接することになるであろう。

比較文学は単に影響関係を云々することにのみ止まるものではなく、むしろ相互への理解と認識を深めることによって、日本文学・日本文化の特質を明らかにすることにこそその使命があろう。まさに比較文学は国際学であるとともに日本学であり、人文学の新しい可能性を示すものであるという自負のもとに、私どもはこのシリーズを世に送る。

読書子・研究家諸賢の忌憚のないご批判を期待したい。

昭和四十九年八月

編者　福田光治
　　剣持武彦
　　小玉晃一

目　次

はしがき

概　観—ドイツ文学と日本近代文学—……星　野　慎　一　9

明治以前のドイツ人たち　明治初期の翻訳類
森鷗外の登場と石橋忍月　『文学界』同人
初期のハイネ熱　『吾輩は猫である』
自然主義文学その他　耽美派への影響
大正昭和時代の作家たち　リルケの影響

ゲーテ……星　野　慎　一　48

ゲーテとはどういう作家であったか
ゲーテはどのようにして日本に紹介されたか

『若きウェルテルの悲しみ』　島崎藤村
尾崎紅葉　森鷗外　その他の作家たち

シラー……鈴木重貞　86

『西国立志篇』『日耳曼国史』とシラー
『独仏文学史』その他　シラー作品の伝来
シラー作品の研究　シラー歿後百年祭のことなど

ハイネ……鈴木和子　113

ハイネと「まぼろしの詩集」
主として〝抒情詩人としてのハイネ〟紹介
ハイネと嶺雲・啄木・鷗外・樗牛
ハイネと生田春月

シュトルム……岡田朝雄　153

シュトルムとわが国の読者　シュトルムの生涯
『海潮音』とシュトルムの詩　夏目漱石とシュト

ルムの詩　木下杢太郎とシュトルム
立原道造とシュトルム（運命の書『インメンゼー』／翻訳『林檎みのる頃』）

ゲルハルト・ハウプトマン……大久保　寛二
森鷗外のハウプトマン論
ハウプトマンの戯曲の邦訳

リルケ……江頭　彦造
詩人リルケの形成
リルケの詩集の特質（第一詩集／旧詩集／形象詩集／時禱詩集／『愛する神の話及びその他』／『新詩集』『新詩集別巻』／マルテの手記／ドゥイノの悲歌／オルフォイスへのソネット）　表現様式の新しさ
リルケと四季派（堀辰雄／伊東静雄／立原道造）

トーマス・マン……村田経和 238
最初の飜訳紹介　飜訳の動向
日本文学における受容

ヘルマン・ヘッセ……渡辺　勝 260
はじめに　昭和十年代のヘッセ流行
戦後の日本とヘッセ　小説と詩
ヘッセと片山敏彦　ヘッセと尾崎喜八

カフカ……立川洋三 289
紹介の遅れと現在の関心　カフカ文学の特徴
「アルキメデス点」をめぐって　さまざまな反映
倉橋由美子氏の場合　安部公房氏の場合

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四巻　ドイツ篇

〈概観〉

ドイツ文学と日本近代文学

――概観的にながめて――

星野慎一

明治以前のドイツ人たち

明治以前に来航したドイツ人たちなどは日本の近代文学に何のかかわりもないと言ってしまえば、それまでの話であるが、やがて明治に入ってドイツ文学が入ってくるいきさつを考えてみると、そこへ辿りつくまでのドイツ人との脈絡を一応眺めておくことは、文化現象を広くつかむ上からも、けっして無意味ではないように思われる。

江戸時代にはオランダ人以外の西欧人には貿易の自由が認められなかったから、ドイツ人は表向きには渡来できなかった。だが、二、三のドイツ人の名が記憶され、こんにちにいたるまで語りつ

がれている。

いちばん古く来日したドイツ人は、ハンス・ヴォルフガング・ブラウンという砲術士であった。彼は幕府の命令で寛永十六年（一六三九）平戸で臼砲を鋳造し、それを東インド会社が将軍家光に献じた。その年の五月二十日彼はその臼砲を江戸で試射して成功した。記録によると、一八歩、榴弾がとんだという。はなはだ心もとない大砲ではあるが、日本人たちは大よろこびして、彼は馬や駕籠にのせてもらう士分のあつかいをうけた。その上 600 Reichstaler und zwei Seidenröcke の褒美をちょうだいした。このドイツ語は「小判六〇〇と絹の着物二枚」と解されるが、そんなにたくさんの小判をくれたのだろうか。その辺は、はっきりしない。とにかく、ブラウンのつくった臼砲はこんにちでも、靖国神社境内の博物館におさめられているという。

次に来航したのはエンゲルベルト・ケンプフェル（一六五一―一七一六）である。彼はオランダ船の船医として元禄三年（一六九〇）来日、二年間滞留、その間二度江戸に出張した。大学で哲学・博物学・医学などをおさめた人で、のちに、日本の動植物・歴史・風俗・制度などを研究し、著述をあらわした。当時の風物・習俗などがスケッチされていて、こんにちわれわれが読んでも興味ぶかい。そのなかには「江戸は世界一の都会である」と、しるされている。

三人目は有名をフィリップ・フランツ・ヴァン・ジーボルト（一七九六―一八六六）である。彼もオランダ船の医官として文政六年（一八二三）に来航。長崎出島に約五年間滞留。その間江戸参府もして、高野長英はじめ多くの蘭学者をそだてた。いわゆるジーボルト事件がおきて追放をうけたが、日蘭通商条約締結後安政五年（一八五八）ふたたび来日、文久二年（一八六二）まで滞在した。彼には大著『日本』をはじめ、日本に関する著書が多い。滞日中其扇（そのぎ）という日本婦人を愛し、ふたりのあ

いだに一子いねをもうけた。彼の再度の来日は、この日本妻と娘に会うためであったという。この娘楠本いねは、女医として知られている。

ドイツ留学の途にのぼった森鷗外は、明治十七年（一八八四）十月十一日ベルリンに到着、翌々十三日、旧藩主亀井老公の紹介状を持参して、初代のドイツ公使青木周蔵を公使館に訪ねた。その日の日記に鷗外はしるしている。

公使のいはく衛生學を修むるは善し。されど歸りて直ちにこれを實施せむこと、恐らくは難かるべし。足の指の間に、下駄の緒挾みて行く民に、衛生論はいらぬ事ぞ。學問とは書を讀むのみをいふにあらず。歐洲人の思想はいかに、その生活はいかに、その禮儀はいかに、これだに善く觀ば、洋行の手柄は充分ならむといはれぬ。

のちに再度外相となり、イギリス公使・アメリカ公使などを歴任した、この明治初年の文化人青木周蔵がジーボルトの弟子であったことを知っている人は、こんにちではほとんどいなくなった。

明治以前のドイツ人を語るとき、筆者は次のエピソードを避けて通ることはできない。それはハイネのことである。ハイネは明治二十年代以来ゲーテと並んでいち早く日本文壇に紹介され、大きな影響をあたえたが、彼の詩は彼の生存中すでに日本で翻訳されていたらしい。ハイネは一八五四年（安政元年）に発表した『告白』という自伝風な回想録のなかで、そのいきさつに触れている。彼はパリでビュルガー博士というオランダ人にめぐり逢った。博士は日本の長崎に三十年も住んでいたことがあり、ジーボルトといっしょに日本に関する著書を刊行した人でもあった。ビュルガー博士の話によると、ハイネの詩が長崎で日本語に翻訳されていたということであった。ハイネはそれを書いて大いに気焔をあげている。

誰だって、ぼくほど若くて月桂冠を得た同國人は、いやしない。わが同僚のヴォルフガング・ゲーテが『支那人でさえふるえる手つきでヴェルテルとロッテをガラスに描いている』などと、うれしそうに歌うならば、ぼくは――一度くらい自慢してもよいことだと思っているのだが――その支那での名聲に――なほはるかにありえないような名聲、つまり日本での名聲を、對応させることができる。

同国人とはユダヤ人を指している。その当時ハイネは、ユダヤ人であることをむしろ誇りにしていた。ベルネやメンデルスゾーンのことなどを頭にうかべていたにちがいない。一七七九年ころ、ヴェルテルとロッテを描いた支那のガラス絵がドイツへ渡来した。ゲーテはそれを知り、自分の小説の伝播力のすばらしさを誇る気もちもあって、『ヴェネティア短唱（三五）』のなかで、そう歌ったのである。そのゲーテの向うを張る意味で、おれのほうはもっとすごいぞと、ハイネが力んでみせたのである。

ハイネの記述によれば、長崎で翻訳が出版されたのは『告白』（一八五四）が発表される十二年前ということだから、一八四二年ころ、つまり天保十三年ころということになる。だが、ハイネの言葉にもかかわらず、こんにちその証拠はどこにも残っていない。勝海舟がハイネを訳したのではないかと、一時信じられたこともあったが、その推測が誤りであることが、近年明らかとなった。それにしても、ハイネがその当時日本人にも伝えられていたことは、たしかな事実であろう。

明治初期の翻訳類

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com